

第2回 学校運営協議会 議事録

1 日 時 令和5年10月20日（金） 午前10時から正午まで

2 会 場 静岡県立吉田特別支援学校会議室

3 参加者

○委員

【保護者】	畑 和幸 様	P T A会長
【地域住民】	桐田不二雄 様	吉田町片岡区自治会長（欠席）
【学校運営に資する活動者】	藁科 知行 様	駿遠学園管理組合園長
【学識経験者】	横山 孝子 様	浜松学院大学教授
【その他】	栗林 均 様	社会福祉法人一羊会理事長

○学校

校 長	稲葉 敏光	副校長	池上 千穂	事務長	土戸 美樹
教 頭	松本比呂美(欠席)	分教室教頭	小澤真由美	小学部主事	井鍋 恭子(欠席)
中学部主事	菅野 圭	高等部主事	田中 康暁	肢体訪問統括	山本 由希
教務主任	和田加恵子	コーディネーター	紅林 亜朋		

4 議事録 * 司) 司会 委) 委員 学) 学校職員

(1) 校長挨拶

給食の業者についてニュースにもなり御心配をお掛けしたが、県が直接調理員を雇用する形を取り、給食を再開することができた。今後、入札を行って12月から業者委託に移行する予定である。

10月6日には公開授業研究会が行われ、外部から約50名の参加者があった。10月の開催は他校に比べると早い時期だが、いただいた様々な御意見をこの後に十分生かせるというメリットがある。指導をさらに充実させていきたい。

先日は中学部、今日は小学部が3年振りに県外へ修学旅行に行っている。中学部が行った京都の様子を見ると、大変混雑しており、コロナ前と随分状況が変わっている。県外への旅行を継続していなかった分、指導が途切れている所や見直しが必要な所もある。学校経営としても、コロナ禍が明け、やり方に工夫が必要な部分が多い。様々な状況を勘案し、全てを元通りに戻すのではなく、質を上げて取り組んでいけるようにしたい。

(2) 協議

ア 令和5年度学校経営計画取組進捗状況について

(ア) 本校の説明

(イ) 分教室の説明

(ウ) 質疑応答

【本校について】

委) ICTについて、生成AIの導入が増えているが、教育現場での活用はどうか？

学) 教育現場での使用にはルールが必要。現在は、県から各種調査がありルール作りをしている所である。まずは教員が理解を深める必要がある。

委) コロナ禍を経た世の中の変化は大きい。コロナ前に戻るのではなく、現状を見て経営していく視点は素晴らしい。

委) 「道徳の日」とあるが、それについて子どもたちはどう受け止めているか？

学) 子どもに向けた「道徳の日」ではなく、教員に向けている。小学部は道徳の時間の設定をせず、日常の具体的な生活場面の中で道徳の指導をしているため、教員が道徳の価値や項目を確認したり、良い取り組みを共有したりする日としている。

委) 医療的ケアについて、県の状況も新しく変わってきている部分がある。医療的ケアのことについて全校で共有しているという点が大変良い。

委) 近年、様々な災害が起こり、様々なリスクがある。それらに対応するため、児童生徒はどのような取組をしているか。

学) 高等部2年では総合的な探求の時間に、防災を題材としている。学習の中で、県の防災センターを訪れたり、ジュニア防災士の資格を取得したりしている。また、12月には、全校で防災学習の日を設けている。高等部が組み立てた段ボールベッドを小中学部が体験するなどを予定している。

委) 吉田特支ならではのハード面もある。吉田町との協力も不可欠だろう。

委) 学習面では、子ども達が「できた」と感じる自己評価が大切である。「山場」に注目しているとのことだが、「山場」は自己評価（できた）と他者評価（できたね）が一致する部分だろう。学習の主体者は子どもであることを忘れずに取り組むと良い。

委) キャリア教育について、教員の他学部交流の取組がとても良いと思う。それに加えて保護者も他学部を参観できる日があると良いが、どうなっているか。

学) 運動会やもえぎまつりの機会に他学部の様子も見てもらえている。参観日には他の学部の様子も見られるようにしている。高等部の実習の出発式には、他学部の保護者にも参観してもらえようようにしたいと考えている。

委) 就学前の子どもの保護者は、目の前の就学について考えるのが精いっぱいの子があるが、先の姿を見て考えていくことが必要だと思っている。

委) 交流籍を活用した交流及び共同学習の現状を教えてください。

学) 小中学部の約半数の児童生徒が希望して取り組んでいる。小学部は朝の会の時間での交流をしている。交流には教員の引率が必要なため、交流に行かない児童の指導体制も考えると、現在のやり方が本校には合っていると考えている。引率教員の代わりにボランティアを入れる県の仕組みもあるが、申し込みはない。中学部は交流校ごとにまとまって、支援学級と一日交流をしている。

委) この交流の制度については、学校側に負担が多く、課題があると感じている。実のある交流ができるように、県がもっと制度を整えると良い。

委) 「調和的な発達の基盤の着想感覚を高める」とはどのような研修か。

学) 自立活動の目標からの研修である。児童生徒の心身の様子について、全人的に、心理面も含めて調和的に捉えていこうという内容である。

委) キャリア教育について、世間の状況も徐々に変わってきており、卒業後の進路の選択肢も様々となっている。進路先でうまくいかない例もあるが、どのように捉えているか。

学) コロナの3年間、外部へ出る機会が減り、家庭、学校などの役割分担が曖昧になってしまっていると感じている。例えば、自主通学を進めたい生徒が、コロナ対応のため公共バスに乗ることを控え、送迎やスクールバスに乗ることになり、自主通学が滞ってしまっているということがある。家庭と協力し、一人一人の自立度に合わせた取り組みをしていきたい。

学) 高等部でも社会に出てから本当に必要な力は何か考え直している。自己理解、状況や気持ちを伝える力、つまりいても立ち直るレジリエンスが大切だと感じている。家庭の支援が難しい場合ほど、本人の力、関係機関とのつながり作りが重要である。

【分教室について】

委) 在籍しているほとんどが、施設入所している子どもたちである。その子たちの生い立ち等からの特性を捉えた学びの計画にしていってもよいのではないか。

イ 令和5年度コミュニティ・スクールの取組について

(ア) 進捗状況の説明

(イ) 質疑応答

委) とてもよくやっていて子ども達も意欲的に取り組んでいる様子が分かる。心から「やりたい」という気持ちで取り組んでいると、「ボランティア先生との学習はこれで終わりだよ」と伝えたとき、「お礼をしたい」「ありがとうの会をしたい」等の意見が出てくるはずである。それらが実現できるように学習を進めていくと、非常によい学びとなるだろう。

学) 昨年度も小学部でそのような学習をした。子どもたちの気持ちの流れに沿った学習となるよう続けていきたい。

委) 吉田町は、海や畑、有名な企業等、資源が豊富である。幅広く展開できそうだ。

学) ボランティア先生以外にも、外部講師という形で招いたりこちらから出向いたりして学習をしている。様々なつながりを大切にしていきたい。

(3) 報告

本校各学部等の状況

(4) 学校参観



学校参観の様子

(5) 閉会